

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 寺境 宏介

論 文 題 目 Oncologic Reappraisal of Bile Duct Resection for  
Middle-Third Cholangiocarcinoma

(中部胆管癌に対する胆管切除術の再検討)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

小寺 泰弘 

名古屋大学教授

委員

藤 岡 光弘 

名古屋大学教授

委員

安藤 雄一 

名古屋大学教授

指導教授

江 畑 智希 

## 論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

今回、中部胆管癌に対する胆管切除術の臨床的意義について、多施設共同研究が行われた。中部胆管癌に対しては膵頭十二指腸切除術が施行されることが多い。生存率を比較検討したところ胆管切除術群での長期予後が不良となり、標準術式として膵頭十二指腸切除術が推奨された。しかし腫瘍長径が 15 mm未満である症例、あるいは胆管断端までの距離が 10 mm以上確保できた症例では膵頭十二指腸切除術と比較して同等の予後が得られた。胆管切除術は断端陽性となりやすい手技であり、適応条件を絞ることにより胆管切除術が選択肢となりうることが示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した

1.断端が陽性となる可能性があり、術中迅速病理検査にてその評価を行うことは非常に有用と考えられる。しかし施設によっては、常勤病理医の不在などを理由に検査ができない場合があり、全症例での迅速検査は困難と考えられる。過去に断端陽性を回避するための肉眼的距離が報告されており、これと本研究の結果が矛盾していないことから、術中病理検査ができない場合に適応可能な、有用な条件と考える。

2.IDUS など超音波検査は深達度評価に非常に有用と考える。また MDCT においても本文中に述べられているように正診率が高く、術前評価として有用と考えられる。ただしいずれも比較的新しい検査であり、また IDUS は施行できる施設が限られている。本研究においても施設により検査内容にばらつきがみられた。今後、これらの術前検査結果と実際の病理所見の比較を行い、その正診率や有用性を改めて検討することは重要な研究テーマと考える。

3.術後補助化学療法に関してガイドライン等による明確な適応基準はない。リンパ節転移を認めた場合など、予後不良因子を含む症例において積極的に行われている傾向はあったが、統計学的な差は認めていない。また術後補助化学療法の有無でも予後を比較検討したが、有意差は得られなかった。今後さらに症例を集積し、術後補助化学療法に関しても何らかの適応条件を示すことが必要と考える。

4.当該講座では実臨床経験を一定年数経たところで、全員が大学病院にて研修をしており、研修期間中に手術適応や手術手技などを習得している。方針として大きなばらつきはないと考えられる。

5.本研究における胆管切除術群の予後比較は、最終的に別コホートと検討すべきであるとの指摘がされた。中部胆管癌にて膵頭十二指腸切除術を施行した別の患者群と比較検討する必要があるが、罹患率が低く、症例数が少ないことから現時点での比較検討は困難である。今後さらなる症例を集積し、本研究結果と合わせ比較検討することが必要と考える。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと判断した。

## 試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	寺境 宏介
試験担当者	主査	小寺 泰弘	副査 <sub>1</sub>	藤 成 文 弘
	副査 <sub>2</sub>	安藤 雄一	指導教授	江 畑 智 希
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 術中迅速病理検査にて、断端評価を行うことについて</li> <li>2. 深達度評価における、超音波検査やMDCTの有用性について</li> <li>3. 術後補助化学療法の適応や、予後に与える影響について</li> <li>4. 手術手技や術式選択など、施設間でのばらつきについて</li> <li>5. 臍頭十二指腸切除術との比較について</li> </ol> <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、腫瘍外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				